

高度経済成長と方言分布

—太平洋ベルト， 集団就職， キリシタン語彙—

小川 俊輔(県立広島大学)

1. 高度経済成長・集団就職と長崎出身カトリック信者

・「高度経済成長」

1955年～1973年の19年間、年平均で10%の経済成長。

・「集団就職」

高度経済成長期の都市労働者として、地方の新規中等教育機関卒者（中学・高校卒）が大都市（特に三大都市圏）の企業や店舗などへ集団で就職。

→1955年～1970年までの15年間で、東京・大阪・名古屋の三大都市圏で1500万人の人口増加。

→1965年：長崎県中卒男子の55.1%、女子の72.4%が県外就職（三好，2009）

→福江島（五島）出身、カトリック浜寺教会（大阪大司教区）の元信徒代表の女性（1952年生）の直話

「福江の中学校に大阪から業者が（リクルートに）来た。同じ中学の人は、同じ会社、同じ工場に就職していく、ということも多かった」

c. f. 『大都市の言語生活』（国立国語研究所，1981）…この人口移動を受けての研究

2. 長崎系カトリック用語「ゼンチヨ」の「太平洋ベルト分布」

・「太平洋ベルト」

日本の茨城県から大分県までを結ぶ一連の工業地帯・工業地域（>夜間衛星写真，2012年）

・長崎系カトリック用語「ゼンチヨ」（カトリック信者ではない人）の「太平洋ベルト分布」

– 小川（2019b）Fig. 1：全国カトリック教会郵送調査の回答地点（♥=回答者またはその父母のうち誰かが長崎有縁）

– 小川（2019b）Fig. 2：「ゼンチヨ」が「太平洋ベルト」地帯に分布（発表時地図投影）

（→『天草本伊曾保物語』、『どちりなきりしたん』（1600年版），『胡無知理佐死之略』など用例）

→ c. f. OGAWA（2010）Fig. 2：「ゼンチヨ」が長崎県の離島・沿岸部に分布，意味変化

・長崎出身カトリック信者の「太平洋ベルト」地帯への集団移住・集団就職

– 北九州市小倉の福音宣教開始は1889（明治22）年。当時この町には長崎県出身の旧信者約40人が近くの炭鉱労働者となって住んでいた。（伊東監，1978，pp. 25-26）

– 「泉佐野教会の現情は異色である。そこではすなわち全信徒数1020名中地元の信徒は200名そこそこで、残りの820名は地方出身者である、正に「移住者の教会」の観があるからである。しかもその「地方出身者」の大部分が長崎県（平戸，五島地区が多い）出身であり、その中家族ぐるみの移住者（115家族）を除いた500人以上は独身の若い男女である（内3分の2は女性）点にも特色がある。」（『カトリック移住タイムズ』第43号(2)，1968年1月5日）

- 丸山 (1980) 「最近では、地方出身のカトリック信徒たちが都会での生活になれ、信仰を続けてゆきやすいように、教会側でも特別の努力を払うようになってきた。東京、横浜、名古屋、一の宮、大阪、西宮、広島、長崎、大分、福岡の各教区には、「移動信徒」と呼ばれるこれら地方出身の若いカトリック信徒たちの信仰を激励し、彼らの生活全般について世話をしたり相談にのるために、連絡事務所や移動協議会が設けられている。」 (p. 209)

→ 「ゼンチョ」が「太平洋ベルト」地帯に分布する理由

= 〈長崎出身カトリック信者の「太平洋ベルト」地帯への集団移住〉 (小川, 2019b)

…表 1 長崎教区転出者統計 (発表時地図投影)

3. 繰り返される移住：潜伏キリシタン、かくれキリシタン、カトリック信者の移住史

- ・移住史：小川 (2013), 叶堂 (2018a), 叶堂 (2018b)

西彼杵半島 (外海) → 五島 → 長崎の離島・沿岸部, 佐賀の離島 → 産炭地 → 大都市・中南米

- ・1960 年頃, ボリビアに移住する信徒家族への司祭からの激励の言葉 (五島列島の一島)
「あんたたちの先祖は西彼杵から裸一貫で渡って来たをやけん」

- ・迫害・差別の歴史 → 地理経済・社会経済的困窮

- ・小川 (2006) ; 教会のある場所 = 差別意識 = 別称語の分布 → 移住

- 地図 1~3 ;

「キリスト教の信者さんのことをどう呼びますか？」

「キリシタン, クリスチャン, カトリックなどと言いませんか？」

→ 別称語の分布域

- 地図 4 : カトリック教会存立地 (1948 年) における「カトリック教会高密度存立地域」
- 地図 5 : キリスト教・キリスト教信者に対する差別・差別意識の有無

- ・信仰的確信による南米移住 (ボリビア多民族国サンフアン移住地)

- 移住の理由としてボリビアがカトリックの国というのもあった (1936 年生・男・1958 年入植)。

- カトリックのパードレも移住を応援していた。当時、(長崎県生月島の) 壱部カトリック教会の司祭だった山口福太郎神父様の後押しがあった。昭和 30 年代初め、戦後で地方には仕事がなく、都会に出て仕事を探しに行くという時代だった。ボリビアはカトリック国である。家族みんなで日曜日に教会に行けるということが一つの決め手となった。子どもがばらばらになることも気になった。ボリビアなら一緒に暮らせる。子も親も同じ宗教というのは大きな力だ (1931 年生・男・1958 年入植)。

- 移住地から「誰か、神父でなくてもいいから (カトリックの霊的指導者が) 来てほしい」という希望があった。それを聞いた父が移住を決意した。父は旧信者の家を訪問していた。また、大きな祝日にはお祈りを主導した。イエズス会の神父の手配をしたり、聖歌を教えたりした。ミサではオルガンを弾いた。移住の理由は、開拓ではなく、宗教上の理由だった。(1952 年生・女・1961 年入植)

- 先祖が血で残した宗教ですから守っていきます。(1939 年生・男・1958 年入植)

…移住者の談話を中心資料として, 小川 (2013), 小川 (2019a), 小川 (2022).

→ 「信仰上の理由からの南米移住」という事実の発見, 報告

4. 言語研究者として何をすべきか、何ができるか

- ・私たちのことを書いてください。忘れないでください（2012年2月，サンフアン移住地初訪問時）
- ・藤原（1995）「“きみ、学問は思いやりだよ。”（中略）昭和31年6月7日、私は、はじめて妻をともなって、柳田邸に参上しました。ご隠宅のほうでした。時は移っています。／しかし、この時もまた、先生は、お話しのはじめごろに、“われわれの学問は思いやりだからね。”とおっしゃいました。おことばは、前条のに一致しています。ここに先生の明確なご持論がうかがわれます。／不幸な農民を救うための学問をと心せられた先生は、思いやりの学問の先駆者でありましょう。漂泊の民にまなこをそそがれた先生は、思いやりの学問を実践せられたわけです。琉球列島を問題とせられた先生にも、かならずや「思いやりの学問」のご心境があったことでしょう。いわゆる終戦後となって、先生が若い世代の者の将来、あるいは子どもたちの将来にものごとを託そうとされ、小さな子どもたちへも多く呼びかけをなされたのは、これまたすばらしい「思いやりの学問」であったと申せましょう。国語教育・国語問題へのご関心のあつよさ、選挙民になることを予定されての子どもの教育のお考えなど、なんとも、「思いやりの学問」の遠大なものがあります。考えてみますと、先生のご著者はみな、「思いやりの学問」のご本であるように思われます。」（pp. 183-185）
- ・西尾（2017）「4. 方言形成論と社会言語学とその意義／方言形成論は、地域社会や人の暮らしを議論の前提・中心に据えている。小川論文は、福田アジオの論を引用して、柳田自身は「地方の「無歴史地域」の「無歴史住民」自らの歴史をあきらかにしようとした」（p. 287）ことを紹介した。そのような視点を持ちつつ、これまで「無歴史」に処されてきた地域や住民を、ことばの分析から素描し、後世に残しているのが本書であると捉えると、本書の魅力はさらに増す。方言形成論は、社会や歴史、人の暮らしの特性のどのような側面を描き出すのか。言い換えれば、ことばは社会とどのように関わっているのか。そのような問いを、方言形成論が内包しているならば、それは、「社会の中で生きる人間、乃至その集団とのかかわりにおいて各言語事象あるいは言語運用をとらえようとする」（真田ほか、1992, p. 9）社会言語学の一分野であるとも言えるだろう。（中略）いずれにしても、無歴史に処されてきた地域・生身の人々の生活や喜怒哀楽は無数にある。その分だけ、研究課題がある。少し斜に構えて現代社会を見ると、多くの常民が現代的な諸事情を抱えつつも、光を当てられることなく暮らしているように見える。そこに光を当てることにも、方言形成論の「現代的意義」があるのではないだろうか。」（p. 77）
- ・杉村（2008）「田川郡香春町の炭坑ことば」
…東京都立大学の方言基礎語彙研究の方法による炭坑ことばの意味記述。
1924年、1929年、1931年生まれの前女性炭坑労働者3名からの教示に基づく

5. 付章1：「ザビエル宣教地分布」

- ・ザビエルの宣教地地図（発表時地図投影）

鹿児島 > 平戸 > 堺 > 山口 > 大分

- ・長期滞在するなどして宣教の足跡が残る土地の土産物・公共施設名などに「ザビエル」関連命名あり。

ザビエル公園	鹿児島
ザビエルとは“新しい住まい”	鹿児島
フランシスコ・ザビエル記念碑	平戸
ザビエル公園	堺
堺まつりキャラクター ザビエコくん	堺
ザビエル公園	山口
南蛮菓ざびえる	大分

⇔ お菓子及び観光地「クルス」の分布(図) (小川, 2011) 及び (小川, 2014)

6. 付章2:「著名な宣教師分布」

・マルク・マリー・ド・ロ Marc Marie de Rotz

…パリ外国宣教会所属のフランス人宣教師。長崎県外海地方において、貧困に苦しむ人々のため社会福祉活動に尽力。

c.f. ド・ロ神父に指導された出津の出身である。神父の祖先はナポレオンの大切な配下だった。厳しい方だったが、良い方だった。私は迫害されたキリシタンの子孫である。おばは拷問を受け、火あぶりにされた。浦上四番崩れで最後の最後まで苦勞した家系（1932年生・女・1955年サンファン移住地入植）

→ド・ロさまそうめん

・ペトロ岐部

…「ペトロ岐部と187殉教者」として2008年にカトリック教会の福者に。司祭になるべくローマへ向かう途上、日本人として初めてエルサレムを訪問。遠藤周作（1979）『銃と十字架』（中央公論社）主人公

→ドン・フランシスコ／ペトロ岐部詰め合わせ

※以上、「5. ザビエル宣教地分布」と「6. 著名な宣教師分布」の分布には「**歴史地理的必然性**」あり

・宗教改革：1517年、ルター「95か条の意見書」…免罪符販売に対する異議申し立て

・イエズス会の世界宣教：宗教改革による失地（ドイツ、北欧など）回復の意図

→西回り：インド > 中国 > 日本（西日本）

参考文献

カトリック移住タイムズ 43(2), 1968年1月5日発行

藤原与一 (1995). 愛心愛語抄 三弥井書店

伊東誠二 (監修) (1978). 萌芽 福岡教区50年の歩み カトリック福岡教区

叶堂隆三 (2018a). カトリック信徒の移動とコミュニティの形成—潜伏キリシタンの二百年— 九州大学出版会

叶堂隆三 (2018b). 「山の教会」・「海の教会」の誕生—長崎カトリック信徒の移住とコミュニティ形成— 九州大学出版会

丸山孝一 (1980). カトリック土着—キリシタンの末裔たち— 日本放送出版協会

三好千春 (2009). 1960年代の青少年労働者とカトリック教会 南山神学, 32, 103-124.

西尾純二 (2017). 書評 小林隆 (編) 『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論—』 ひつじ書房, 2014 社会言語科学, 19(2), 75-77.

小川俊輔 (2006). 九州地方域方言におけるキリシタン語彙 Christao の受容史についての地理言語学的研究 広島大学大学院教育学研究科紀要. 第二部, 文化教育開発関連領域, 55, 173-182.

OGAWA Shunsuke (2010). On the decay, preservation and restoration of imported Portuguese Christian missionary vocabulary in the Kyushu district of Japan since the 16th century, *Slavia Centralis*, III(1), 150-161.

小川俊輔 (2011). 日本社会の変容とキリスト教用語 社会言語科学, 13(2), 4-19.

小川俊輔 (2013). 南米に移住した長崎のキリシタン家族—ボリビア多民族国サンファン日本人移住地の事例— キリスト教史学, 67, 134-156.

小川俊輔 (2014). キリシタン文化と方言形成—Jesusの歴史社会地理言語学— 小林隆 (編) 柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論— ひつじ書房 pp. 265-290.

小川俊輔 (2019a). ボリビア多民族国サンファン移住地におけるカトリック教会の創成と発展—南米の日本人移住地における「キリシタン移住者」の信仰生活— 県立広島大学人間文化学部紀要, 14, 115-129.

小川俊輔 (2019b). 長崎系カトリック用語の全国伝播—守り継がれる「ゼンチョ」、移りゆく「旧信者」— 日本方言研究会研究発表会発表原稿集, 108, 1-8.

小川俊輔 (2022). ボリビア多民族国サンファン移住地におけるカトリック教会の創成と発展 (2) —太郎神父, 次郎神父, 2人の信徒の活動を中心に— 県立広島大学地域創生学部紀要, 1, 169-181.

杉村孝夫 (2008). 田川郡香春町の炭坑ことば 福岡教育大学国語科研究論集, 49, 63-84.